肥松の工芸品

伝統工芸士・有岡良員さん

樹齢数百年の松が醸し出す、深みある光沢

父が復活させた技術を受け継ぎ、
松やにをたっぷり蓄えた肥松（こえまつ）で工芸品をつくる有岡良員さん。
数百年の時を経た松による工芸品は深みのある光沢をたたえ、
歳月とともにその色を変えていく。

数百年の時が育てた松やに

香川県のJR高松駅から車で20分ほど。周囲に畑や田んぼが広がる住宅街の一角に、クラフト・アリオカの工房がある。ここで、有岡良員さんは肥松を使った工芸品の制作に勤しんでいる。

肥松とは、樹齢数百年に及ぶ松の中心部で、特に松やにが多く含まれている部分を指す。関東では老松、関西では脂松といわれ、肥松は瀬戸内地方独自の呼び方だ。瀬戸内地方ではその気候風土により、やにを含んで赤みを帯びた美しい木目の肥松が育まれてきた。香川の肥松はもっぱら黒松だという。

「樹齢300年を超えないと松やにの量が足りないので、細い木は使えないのです。うちで使っていた肥松には、樹齢が600年近いものもありました」

香川県の伝統工芸士に認定されている有岡さんはいう。

有岡さんの父、良益さんが肥松を使って工芸品をつくるようになったのは、戦後すぐのこと。それまで良益さんは木地師として、漆芸家・磯井如真さんの下で漆を塗る前の木地を制作していた。しかし、良益さんの技量を評価した磯井さんに勧められ、江戸時代から続いていたもののなくなりかけていた肥松木工の復活を手がけることになった。

有岡さんは子どもの頃から父親の仕事を手伝っていたが、家業を継ぐつもりはなく、大学卒業後は高校の教員をしていた。しかし家庭の事情で27歳のとき、肥松の工芸品づくりを始めた。

長期の乾燥で木のクセを抜く

木を使った工芸品ではろくろを使った成形もカンナによる仕上げも重要だが、肥松で大きな意味を持つのは、そうした作業に入る前の乾燥だ。

木は、切った後も生きている。どんな種類の木でも加工するときには一定期間乾燥させるが、肥松の場合、その期間は少なくとも20～30年。中には50年くらい寝かせて、ようやく使えるようになる場合もある。温度や湿度が急に変わったりすると、肥松の内部にある松やにが蜂蜜のようににじみ出てくることがある。十分に乾燥させないと、購入後に松やにが出てきてしまうようなことになりかねない。

乾燥は、自然乾燥が基本だ。「電気やガスを使った強制乾燥も可能かもしれませんが、それでも乾燥に5年はかかるでしょうから、エネルギー代がとんでもない額になってしまいますね」と有岡さんは話す。

自然乾燥で数十年寝かせても、松やにが全部抜けきるわけではない。ある程度の松やには内部に残るのだ。そのため、肥松の工芸品は手触りがしっとりし、時間とともに色が濃くなっていく。日にかざすと松やにの多い部分が妖しいきらめきを放つの

写真のように、小皿を光にかざすと透ける（右側、上から３番目の器）

ありおか・よしかず（右。左から、山田泰敬さん、妻のかおりさん） 1955年、香川県生まれ。大阪芸術大学で陶芸を専攻した後、高校教員となったが、27歳のときに父親が興したクラフト・アリオカに入り、本格的に木工品づくりを始めた。2001年、香川漆器の伝統工芸士に認定される。雅号は有岡成員。つくるのは茶器や食器が多いが、キーホルダーや時計の文字盤などを手がけることもある

「松には春目（春から夏にかけて成長が旺盛な部分）、秋目があるので彫刻にはむかない」と有岡さん。削る際に出る木くずは湿っているような感触で、松の香りが漂う

も大きな特徴だ。

「肥松はクセの強い木です。切って板状にしてからもクセが出て、歪んだり曲がったりします。だから長期間寝かせて、クセを全部出させるのです。工芸品にしてからクセが出て、歪んだりしたら困るでしょう」

クセの強い肥松は、木目が急に順目から逆目に変わっていることもある。逆目にはカンナをかけることができない。しかも松やにがたっぷり含まれているから、加工はことのほか難しい。

「ろくろを回してカンナで削ると、普通の木なら木くずがフワーッと飛んでいきます。しかし肥松の場合、松やにが多いため木くずがしっとりしていて重く、フワーッと飛ばず体にまとわりつき、作業を終えるとまるで雪男のようになってしまいます。しかも松やには温度が低いと固くなるため、カンナなどの刃は頻繁に研がなくてはなりません」

独自の道具類が美しさを生む

有岡さんの制作を支えているのが、独自の道具類だ。陶芸などで一般的に使われるろくろは地面に対して水平に回転させるが、有岡さんが使うろくろは地面に対して垂直に回転させる、讃岐式、香川式と呼ばれる独特なものだ。昔は水車を動力にしていたが、今は電気モーターで動かす。

１台のろくろには回転ギアが３つあり、ベルトをどのギアにかけるかでろくろの回転速度が変わる。有岡さんはろくろを回しながら、さりげなくベルトをかけ替える。その都度、ろくろを止めたりはしない。修練を感じさせる光景だ。このろくろ、今はクラフト・アリオカにしかない。つくるメーカーも修理できる業者もいないので、有岡さんは「だましだまし使っている」と苦笑する。

有岡さんが使うカンナも、通常のカンナとは異なり、大きなノミのような形をしている。こうした道具類は、自分たちでつくることも多い。有岡さんが「木さげ」と呼ぶ工具は、もともと父親の良益さんが考案したもの。松などの針葉樹は固い部分と柔らかい部分が不規則にあり、切れ味の鈍い刃物で削ると面が波打ってしまう。それを防ぐため、良益さんは鉄を切断するために使われるスウェーデン鋼ののこぎりを改造し、オリジナルの木さげをつくり上げた。「この木さげを使うことで、きれいな鏡面仕上げができるようになりました」と、有岡さんの制作に欠かせないものになっている。

肥松のストックはあと2年

有岡さんは、茶器や食器、酒器、盆などさまざまな工芸品をつくって

松の木は寝かせると固くなり、木のクセが強くなる。寝かさないと反ったり、逆目になったりするのでクセを出しきるために木を寝かせる

いる。肥松だけでなく、栗の木や栃の木などを使ったものもあるが、それらは漆などの塗装を施しているものが多い。

肥松の場合、松やにが多く漆などを塗っても剥離してしまうため、仕上がりにはオリーブオイルを塗るだけだ。だから、肥松の工芸品はどれも木目が鮮やかに浮き出ている。

「木の器の扱いは難しいものではありません。もともと自然なものなので安全ですし、落としてもめったなことでは割れません。肥松の場合だったら、使った後、さっと水洗いして、あとは日の当たらない風通しのいいところに置いて乾かせばいいだけです。最初のうちは、できれば毎日のように乾拭きするといい。そうすると、目幅の狭い秋目のやにが目幅の広い春目に入り込み、全体に色つやがよくなっていきます。肥松の品は、磨きで光沢が変わり、時間とともに色が濃くなっていきます。使う人が、使うことで完成させるのです」

クラフト・アリオカは店舗を兼ねた工房だが、交通の便がよくないため、ここまで商品を買いに来る人は少ない。有岡さんのつくった工芸品を扱っているオンラインショップもあるが、有岡さん自身が重視している販路は百貨店の展示会だ。展示会ではたいてい、実演も行う。以前、髙島屋で展示会を行ったときは、消防署から注意されるほど大勢の客が押し寄せたという。

また以前、有岡さんのことがテレビで紹介されたときは注文が殺到し、同じ茶托を1日に何百個もつくったことがあった。だが、今は、たとえつくりたくてもそう多くはつくれない。樹齢数百年の肥松の木が、ほとんど入手できなくなっているからだ。たとえあったとしても、貴重な黒松だから切ることが許されない。今、有岡さんの工房にストックしてある肥松は、良益さんの時代に買ったものだ。

「本気でつくれば、肥松のストックはあと２年くらいしか持たないでしょう。栗の木なども最近は値段が上がって、おいそれとは買えない状態です」

今、クラフト・アリオカには有岡さん以外には高齢の職人が１人いるだけ。漆芸を学ぶために週に１回、工房に通っている若い人がいるが、現状、有岡さんの後継者はいない。

材料の肥松は手に入らず、後継者が育っていない。良益さんが復活させ、有岡さんが継承した肥松の工芸品は、失われたテクノロジーになりつつある。しかし、有岡さんの手による美しい肥松の工芸品は、世代を超え、日々の生活の中で人々に長く愛されていくだろう。